
英雄王に拾われし子

七瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄王に拾われし子

【Nコード】

N1481Y

【作者名】

七瀬

【あらすじ】

Fate/zeroの最後にギルガメッシュに拾われた赤子の話。

もちろん二次創作であり、原作は一切関係ありません。

亀更新ですが、どうかお付き合いください。

「雑種よ、我が気まぐれに預かったことを光栄に思うがいい……千代先まで誇れようぞ」

始まり

辺りを埋め尽くすのは黒い炎。

道にあるのは死体の山。

さながら地獄絵図である。

そんな中、悠々と闊歩する男がいた。

満身創痍でありながら、しかしどこか高貴な雰囲気をかもしだす金髪の男。

自身から流れる血には気も止めず、この地獄絵図を見て回っている。

「受肉、とはなんたる感覚か……なんとも言いがたい」

男は己を確かめるかのように歩みを進めた。

そして、すでに死んでいる母親らしき死体に守られるようにして安らかに眠っている赤子を見つけた。

王の気まぐれ

赤子を片手に抱え、男は考えた。

「なぜ我はこのような雑種を拾った」

男の手に抱かれ、すやすやと寝息をたてている赤子は、何が起きているのか全くわかつてはいないのだろう。

「……わからん」

男はしばし赤子を眺めたあと、呟くように言うと、また歩き出した。

「パスは……切れているか……肝心なときに使えんヤツだ。まあ、いい。ならば暫しの観光とするか」

男はどうでも良さそうに、しかし赤子は手から離すことなくまた歩き出した。

英雄と赤子

災害地から抜け出した男が最初にとつた行動は住居の確保だった。

適当な家にズカズカと入り込み、リュックいっぱいのお札束を投げすていい放つ。

「今からコレは我の物だ。金はくれてやる。今すぐ失せろ、雑種」

家主は何事かと思つたが、目の前の大金に抗うすべはなかつた。

こうして比較的大きな家を手にいれた男。

しかし彼は満足はしなかつた。

「この程度の家でわづかながらとはいえ住まねばならぬとは……」

はやいうちに新しい家を調達しようと思つた男であつた。

彼が家に入り、最初にしたことは赤子の世話である。

天上天下唯我独尊を地でいく男とは思えない行動であった。

「牛乳を飲むのではないのか……？」

しかし男は育児にはとことん疎かった。

だが、自分のモノを自分で管理できないなどは自身の性格が許さず、男は育児マニュアルを片手に赤子と向かい合っただけであった。

「やっつけてられるか！ 王たるこの我がこのようなことをしなければならん！」

赤子を拾って三日目、男はついに匙を投げた。

もともとこういうことは男の得意とすることではないのだ。

今にも家を出ていこうとする男を赤子はじっと見つめていた。

「な、なんだその目は……」

多少の情が移ったのか男の足と決意は鈍った。

もつとも、男が情を誰かに与えること自体、奇跡のようなものなのだが。

「ええい！　こちらを見るな！」

男が赤子に近づくと、赤子はそれは嬉しそうにわらうのであった。

英雄王のお引っ越し（前書き）

1話1話が短いですが、何回か更新してまいりますので、ご勘弁を……

英雄王のお引越

「王たるこんなところに長々といられるか！」

男はついに我慢の限界だった。

赤子がいる手前、無理に居場所を転々としてはあらぬ不快感を赤子に与えかねない、そう考え男曰くボロ小屋（一般人にすればわりと豪邸）にとどまること約3ヶ月……

男の不満が臨界点を突破した。

「いくぞ！ 貴様ごときに気など使ってられん！」

言うなり男の行動は速かった。

荷物ひとつ持たずに赤子を腕に抱えると家を飛び出した。

それでも赤子が苦しまないように優しく抱えているあたり、男の赤子に対する情の深さが見てとれる。

そもそも男が1個体に情をかけるなど、それこそ天地がひっくり返ろうともあり得ないのだ。

それも男自身が不快感を我慢して世話をするなど宇宙が減びてもあり得ない。

にも関わらず、にも関わらずだ、男は赤子を今もなお世話をしている。

これは気まぐれなどという領域を明らかにこえている。

「ふむ……及第点というところか……」

男が目をつけたのは少し古風な和風の家。

まさに『和』という感じの家であった。

「ここは今から我のものだ！」

そしてまた、男は家をてにいれるのであった。

英雄王と赤子の1日(前書き)

こんなギルガメッシュさんがいてもいいはず。

英雄王と赤子の1日

「ギー、ギー！」

「貴様……いまなんといった……？」

男は衝撃を受けた。

男が驚くことなど百年に一度とない。

それ故に男は赤子に聞き返した。

「ギー、ギー！」

「ふはは……フハハハハ！ 名前を！ 我的名前を呼んだぞ！ ただの人間ごときの赤子が！ 我的名前を！」

男、ギルガメツシュは歓喜した。

なぜこのように感情が昂るのかはわからない。

しかし、ギルガメツシュはひたすら赤子を腕に抱いて喜び、そして

……

「ふはは！ 素晴らしいぞ！ 流石ではないか！ ……！？」

そして、自分の致命的な失念に気がついた。

「こやつ……名前が……ない！」

ギルガメツシュは頭をかかえた。

なぜこのような初歩的なことを忘れていたのか、王たる自分にあるまじき失態である、と。

「仕方がない、この我自らが名前をくれてやるとしよう。光栄に思うがいい！」

フハハと高笑いをしたあと、ギルガメツシュは途端に真剣な表情になり、名前を考え始めた。

「やはり我の名前は入れねばな……ギルドレン……ギルランド……メツシュなども……」

凄まじい名前である。

こんな名前をつけられては将来、有望ないじめられっ子になることだろう。

もつとも、そんなことになれば、ギルガメツシュは全身全霊で相手を殺すだろうが……

「しまった！ こやつは冬木、日本の、東洋の人間！ 我のような名前はつけられん！」

ギルガメツシュがこの事に気がついたのは必死に名前を考えはじめてから5時間後のことである。

「ええい！ どうしろと言うのだ！ 王たる我が何故ここまで苦勞して考えねばならんだ！」

そついいながらもギルガメツシュは笑顔であつた。

すでに立派な親の顔である。

「我にここまでさせるのだ……世界一幸せな赤子よのう……」

そついつてギルガメツシュは再び思考の波に身を委ねた。

英雄王と赤子の名前

「ギール、ギール！」

「恭介、ギールではない、ギルだ」

「ギール、ギール！」

「ふっ……まだまだ幼いか……」

ギルガメッシュは三日もの間考え続け、ついに赤子に名をつけた。

恭介、それが赤子の名前である、

「我の子なのだ、地球一強い男子になろうぞ……」

最強だから強になんかつけて強介見映えが悪いから変えて恭介。

なんとということだろうか、まともである。

ギルガメッシュという男が名づけたにしては気持ち悪いほどに普通である。

「おお！？ き、恭介ええええ！！ 貴様、歩けるのではないかあ
あああ！？」

「あーあー、ギール、ギール！」

はたしてこの男は本当に英雄王なのだろうか。

今の彼を見た者全員がそんな疑問が沸き上がるほどにギルガメッシュは赤子、もとい恭介の成長に狂喜乱舞していた。

正直、ギルガメッシュ自身、何故ここまで恭介に入れ込んでいるのかわからない。

だからギルガメッシュは考えることをやめた。

かつて飼い慣らしたライオンに向けた些細な情より強く固い情を恭介に感じていた。

自身の感情、唯一無二のもの、なればこそ自分がどうしようが自分の勝手。

これから先はどうなるかはわからない、途端に興味が薄れ捨てるかもしれない、はたまた情が続くかもしれない、ギルガメッシュはその時まではいままで通り情をかけてやることにしていた。

「フハハハハ、恭介は幸運なやつだ……」

「うー？」

「フン、いましばらく貴様に情をかけてやることにしよう、感謝せよ」

「あー！」

恭介は訳もわからずただただギルガメッシュの腕の中で笑うのであった。

英雄王と親子愛（前書き）

1200文字程度に長くしてみました。

これくらいの長さでいいですかね？

しばらくはこのくらいで書いていこうと思います。

英雄王と親子愛

結果から言おう。

恭介という人間は大変幸運な人間であった。

今はまだ幼稚園児だが、すでにその片鱗をみせている。

彼が砂場で遊べば砂金が山のように沸き、穴を掘れば埋蔵金が見つかり、くじを引くこと十数回、すべて一等を当て、マークテストをやらせればいかなる難易度であろうとも九割は正解を叩き出す。

もはや呪いの域である。

さらにギルガメッシュという男に育てられたこともあってか、黄金率まで身に付いていた。

しかし……

「恭介が倒れたとは誠かあああ！？」 恭介！ 恭介ええええ！！」

「恭介くんのお父様！？ 落ち着いてください！」

しかし、恭介という人間は非常に病弱であった。それもそのはず、恭介がいた、あの環境下において全くの無傷であるわけがないのだ。

恭介が倒れたとギルガメツシュに報告が来たのは約二分前である。

ギルガメツシュは幼稚園の先生に詰め寄ると肩を強く揺すった。

「落ち着けたと!? ふざけるな!! 恭介が! 我の息子が倒れたのだぞ!? 落ち着ける方が狂っておるわ!! それにも関わらず落ち着けたと!? どうやらそうとう死にたいとみえるな!?!」

「ひ、ひい……」

殺気全開で今にも殺しかねないほどの勢いでさらに詰め寄るギルガメツシュに幼稚園の先生は悲鳴をあげた。

「恭介! 恭介ええええ!!」

「き、恭介くんの体調にさわります!」

「なにっ!?!」

勇気ある幼稚園の先生の言葉にギルガメツシュは固まった。

「くっ……恭介が倒れたというのに、何故、何故我はなにもできない……ッ！」

ギルガメッシュは自分の行動を悔やみ、そして己の無力を憎んだ。

「とりあえず、恭介くんは連れて帰りますか？」

「当たり前だ！」

ギルガメッシュは答えるや否や恭介を優しく抱えると幼稚園を後にした。

恭介が目覚めたのはギルガメッシュが恭介を家に運んでから3時間後だった。

「おとうさん……？」

「おお……目が覚めたか!？」

「あ……うん。おはよう……」

恭介はいまいち何があったのか理解できていないようだが、ギルガメッシュ、父親の顔を見ると、安心したように体から力を抜いて微笑んだ。

「大丈夫か？ どこか痛いところはないか!？」

「だ、大丈夫だよ……?」

ギルガメッシュの勢いに若干押され気味に恭介は答えた。

「大丈夫な訳がなからう!! 今月に入って三度、恭介は倒れておるのだぞ!？」

「あ、僕、また倒れたんだ……」

恭介は自分が倒れたことを知り、父親に対する感謝と罪悪感を感じていた。

「父さんは、またずっと僕を看ていてくれたの?」

「当たり前であろう!」

「そっか……ごめんね」

「ごめん……だと?」

恭介のその言葉がギルガメッシュの怒りに触れた。

「ふざけるなよ、恭介。我はお前の世話を苦だと思っている、とでも思っているのか?」

「え……」

「だとしたならば、恭介。お前はここの俺を侮辱したことになる」

「我はお前の父親なるぞ? 息子の世話をすることが何故、苦に思えようか」

「父さん……」

「子供は黙って親の気持ちを享受せよ」

「……ありがとう」

「わかったならば黙って寝てろ。この王たる我自らが恭介のために食事を用意してやる」

ギルガメツシユはそう言つと部屋を出た。

部屋には涙をながす恭介だけが残つた。

英雄王と親子愛（後書き）

ギル「恭介ええええ！！ かつこいいぞー」

先生「あの、お父様、お静かに……」

ギル「恭介の初の晴れ舞台なるぞ？ 邪魔するな。恭介ええええええ！！」

先生「他の児童の皆様を晴れ舞台を激しく邪魔していますから！」

ギル「他の雑種なぞ知ったことか。恭介ええええええ！！」

先生「あああ、このままではかつてない入園式になっています……」

ギル「しるか。恭介ええええええ！！ ……バッテリーが切れた……だと！？」

先生「それでしたら静かに……」

ギル「おい、その雑種。貴様のビデオを使ってやる。ありがたく献上せよ」

先生「恭介くんのお父様あああ！？」

このあと恭介の

「おとーさん、めっ！」
の一言でギルガメッシュは静かになった。

幼稚園の先生にトラウマを植え付けた恭介の入園式だった。

英雄王と今後の方針（前書き）

感想がたくさん、ありがとうございます。

とても励みになっております。

ここまでくると更新しなければ……という義務感が沸いたりして
ます。

英雄王と今後の方針

「変化はあるか？」

「……なにもない……かな？」

「これも……ダメだというのが……」

ギルガメッシュは度々恭介の虚弱体質を治そうとしていた。

しかしどれも望む結果は得られていない。

「次はどうするか……」

「そんなに無理しなくても……」

「馬鹿者が！ 息子の人並みの幸せを願って何が悪い」

「僕はからだは弱くても父さんがいれば幸せだよ？」

「恭介……」

息子の言葉を脳内でひたすらリピート再生しながらギルガメッシュはさらに考えた。

今までにも散々、手は尽くしてきている。

どのような傷もたちどころに治す秘薬、どのような呪いの類いも治す解呪石、反対に体を強化し打ち消しあう、あらゆる縛りから解放される短刀……

これらの他にも様々なことを試してきたが、どれも失敗に終わっている。

「やはり……泥……か」

ギルガメッシュには心当たりがあった。

恭介がいたのは聖杯の泥が溢れるあの環境である。

何らかの被害にあっていたのはいわば当たり前と言えよう。

むしろ、虚弱体質になっただけ、というのは不幸中の幸いを通り越している。

恭介がいかに幸運な人間かがわかる。

「あの聖杯の汚染具合からして、何があってもおかしくはあるまい……となれば、おそらく次の聖杯戦争まで50年とかかるまい……」

「泥による呪い類いなら、本来の聖杯の力により浄化するほかあるまいか……」

「せーはい？」

「なに、恭介は心配いらん。我にすべて任せよ」

「んー……」

恭介はいまいち納得がいかない感じだったが、一先ずは頷いた。

そんな恭介によくできた息子だと感心しながら、ギルガメッシュはこれからのことを考えはじめた。

第一に聖杯戦争に参加するためにはマスターの資格たる令呪が必要だ。

これを他のマスターから奪い取る必要がある。

次に、魔力供給、ただ生活をするだけではギルガメッシュは魔力を必要とはしないが、宝具をつかうとなれば話は変わってくる。

早急に手だてを考えねばならない。

そして最後に、聖杯自体である。

知つての通り、あの聖杯は汚染されている。

それを破壊したがためにあの事態に陥つた。

とあらば、聖杯を聖杯たる状態に浄化し、本来の聖杯の力により恭介を治す。

そのためには、一先ずは汚染されている聖杯を手にいれなければならない。

「この三つが大きな問題点……ふっ、まあ、よい。王たる我……父親たる我に不可能などありはせんわ！ フハハハハハ」

「いきなりどうしたの！？ おとうさん！」

今日も今日とてギルガメツシユ宅は賑やかだった。

それから二日後、ギルガメツシユは一人でアメリカの巨大な博物館に来ていた。

「どれもこれも紛い物にグズばかり……つまらん」

どれもこれも歴史的には名のある有名なものだが、ギルガメッシュにとってはゴミも同じ。

悠々と博物館を闊歩するギルガメッシュ。

そしてあるものに目が止まった。

「空気を発生させ続ける石……か」

ギルガメッシュはこれを使えないかと考えた。

「一先ずは試してやるとしよう……」

ギルガメッシュは言うや否や、管理室へと向かった。

それから10分、博物館はギルガメッシュのものとなった。

「案外、すんなりいったか……」

ギルガメツシュの目の前には、魔力を放出し続ける石があった。

本気を出したギルガメツシュは、約3時間程度で完成させた。

持てるかぎりの宝物ほうもつを使い、空気を魔力に変換、効果を拡大させ、一切の消費をしないように物質変換した。

結果、半永久的に魔力を放出する物質が出来上がった。

「効果は眉唾物だが、試す価値はあろう」

ギルガメツシュはその物質を飲み込んだ。

「……ふむ、悪くない。時臣以上の魔力はある……か」

「ただ、効果をあげすぎたか、流れる魔力が多すぎる。これではあと10年とたん。この我が失敗……？ ふん、笑わせるな。完璧に調節してくれるわ」

これから一時間後、ギルガメツシュは自身の中にある部室の調節に成功した。

最高で遠坂の魔術師クラスの魔力を最低でそこから辺の底辺魔術師クラスの魔力を自由に得られるようになった。

「ふん、我にかかればこのようなこと造作もない」

英雄王と切嗣

「なぜ君がここにいる。アーチャー」

「貴様に答える義理などありませんわ。しかし、貴様も中々に様になる格好よのう……雑種にふさわしい」

「……いまの僕には銃器をもつ力もないんだ。今すぐ君の頭をぶち抜いてやりたいのに、僕には不可能だ」

「あまりに滑稽な夢物語よのう……器がしれるぞ、雑種」

ギルガメッシュは切嗣の家にいた。

通常ではあり得ない組み合わせ。

当人たちですら、何故こいつと話しているのか、などと疑問がわいているであろう。

「で、なんで君は僕の家に来たのかと入ってきているのかな」

「答える義理などないと何度言わせるつもりだ？」

「不法侵入して何をいつてるんだ……」

お互いの話は平行線、なかなか交わらない。

「雑種、王の話の聞きなければそれなりの態度があるう」

「君は一体何様のつもりだ!？」

「王だ!」

なんとも笑えるやり取りである。

こんな二人の会話が噛み合うことはなく、さらに時間だけが経過した。

「わかった、僕に話をきかせてくれ」

そしてついに切嗣が折れた。

彼はそうとうギルガメッシュと二人でいるのが嫌らしい。

「感情がこもっておらん、上っ面だけで我の話をきけるとでもおも

うてか、雑種？」

「ブチン

何かが切れる音がした。

これは擬音などの類いではなく、本当に何かが切れる音がした。

「ふざけるな！ 君は一体なんなんだ！？ いきなり家に押し入って長々と意味もなく居座り、用も話さない！ 僕が早く終わらせようとしてるのにお前一向に態度をかえない！ なんなんだお前は！ 魔弾撃ち込むぞ！」

切嗣はついに我慢の限界だった。

それもそのはず、いきなり家に押し入って長々と意味もなく居座り続け、さらにはあの発言の数々、誰でもキレル。

「……はあ」

ついにキレた切嗣をギルガメッシュは冷ややかに見据えたため息をついた。

「なんだ……？」

「雑種よ、まだわからぬか？」

「わかる要素がないぞ？」

ギルガメツシユは静かに続けた。

「我が押し入ってやったのはいつだ？」

「？ 確か朝に士郎を見送ったあと……」

切嗣はギルガメツシユの意図する意味が理解できないまま答えた。

「……まだわからぬか。貴様は生きてる価値すらなかるう」

ギルガメツシユは立ち上がると王の財宝を展開し、中から適当に振り子の剣を取り出した。

そして切嗣めがけて突き刺した

「っ！？」

かのように見えたが、ギルガメッシュの手にある剣は切嗣の横の壁に深々と突き刺さっていた。

ギルガメッシュは切嗣を壁に押し付けながら怒鳴るように言った。

「まだわからぬか!? あの小僧はなんだ! 聖杯の入れ物……貴様の娘は一体どうした!？」

「な……に……?」

切嗣は目を白黒させながら必死に理解しようと努めた。

「貴様が真に一緒にいなければならないのは誰だ!? あんな小僧ではなかるうが!！」

が、切嗣には理解できない。

その王らしからぬ彼の言動を。

「答える、切嗣!！」

「……!」

ギルガメツシュの言葉により、一気に現実に引き戻された切嗣。

「僕に……娘と呼べる人は……いない……」

「歯を食いしばれ、切嗣ッ！！」

うろたえながら答えた切嗣にギルガメツシュは切嗣が死なない程度に手加減を加えて拳を振り落とした。

「しっ！」

壁に叩きつけられる切嗣。

「貴様は、親の心子知らずという言葉をしっているか？」

「……？」

「そんなのは当たり前だ、何故なら、親の心とは常に子供に対して一方通行だからだ。自分の考えを子供に押し付けても何一つうまくないかん」

「その言葉はそういう意味じゃなゲフツ！」

「だまらんか」

ギルガメツシユは再び切嗣を殴った。

「勝手に苦しみ、娘を傷つけるな。貴様の娘は今もただ広い城で待っているだろう。親が嫌いな子供などいはしない、小さい頃にこそ、親が必要だ……」

「……」

切嗣は啞然とした。

これが本当にあの英雄王、ギルガメツシユなのだろうか、と。

もし、何らかの魔術により見た目だけを変化させていると第三者から言われれば、一も二もなく信じるだろう。

「……貴様には、時間がないのだろう。早くいけ」

「……だが、僕は」

「ああ、めんどくさいやつよう！ 黙っていけ！」

ギルガメツシユは懐から札のような物を取りだし、切嗣目掛けて投げつけた。

「なっ!?!」

札から光があふれだし、切嗣を包みだす。

「とりあえず会え、まずはそれからだ」

「アーチャー……っ!」

ギルガメツシユは不敵に笑みを浮かべ、光のなかにいる切嗣を見送った。

後にはギルガメツシユだけが残った。

「さて、小僧にも一応話をしといてやるつか。コーヒーは……ちっ、安物しかないではないか……」

このあと散々家を荒らしたギルガメツシユは、帰ってきた士郎に父

親は出張だと告げ、衛宮宅をあとにした。

英雄王と切嗣（後書き）

ギル「名前か……明らかに東洋にしては違和感があるだろうな……」

ギル「ん？ この菓子は……」

ギル「よし、ギルバート・アルフォードにしよう」

こんな感じで名前を作ったギルガメッシュさんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1481y/>

英雄王に拾われし子

2011年11月7日10時07分発行